ワガママSDGs

2021年度コーディネーターは何を考え、どう動いたか。

WAGAMAMA SDGs reference book for coordinaters 2022

ワガママSDGs

2021年度 コーディネーターは 何を考え、どう動いたか。

Reference Book 2022

一般社団法人
リベルタ学舎

行動したら、「頭で思い描いていたこと」以上が起こった。／マクドナルドで無言で指差し注文していた私が、隣のオフィスに「印刷させてください」と。／物件探しもイベントも、「無理かもしれない」が「あ、できる！」に変わる瞬間をからだで学んだ。／いくら予算があってた、ワガママがないと物事は起こらない。直 実現しなかっ 実ワガママは うする？」を けど、「どる機会になっ 現実的に考えいが一番アツ と。／学校嫌の在り方を考 ス未来の教育はないか。／ ているので生まれて何の 何のために のか」ですよ ために生きるブルだと思っ ね、あれバイど。／「未 るんですけの先のこと、プラス的な いいものを作って挽回じゃなくて 責任に、ワガママに。それが有限な世界を変えていく。／行き着いた場所も見えた風景も想定外だったけど。／ただの高校生が発言しても意味ないって思ってた。／「海外の貧困」というひとつの視点だけにとらわれていた自分を見つけた。／「英語を学ぶ」のでなく「英語で共に学ぶ」仲間を世界につくりたい。／「やりたいことをやりたい！出来ないことは出来ない！」と言う。学校とは違う場で。／「みんなが使える」の「みんな」とは？／「やりたいことをここまでやっていいんだな」という驚き。／SDGsって勉強することじゃなくて、実際に行動することだなって。／ワガママもSDGsもたぶん全部繋がっている。／「頼る」を学ぶ。／凝り固まった世界から、足を踏み出してみた。／最初に感じた自由な発想をぼやけさせない、こと。 2021年度中高生インタビューより

目次

03 overview はじめに —— ワガママSDGsの全体像

04 role コーディネーターの役割

05 case study 2021年度、現場にて

13 attitude コーディネートの姿勢

14 words 協働メンバーとは？ プロトタイピングとは？

overview

はじめに —— ワガママSDGsの全体像

「ワガママSDGs」は、中高生が、自分事の課題を起点に、

地域の産学公民金と協働して社会課題解決に取り組む実践プログラムです。

参加者は自分の視点で課題を発見し、解決するプロジェクトを立ち上げ、

地域の多様な人々と力を合わせて実施します。

ワガママSDGsには、3つ大切していることがあります。

1. 参加者のワガママ＝アイデアを最大限応援する場であること
2. 地域にいる様々な人や資源と繋がり、協力してワガママを実現すること
3. 基金を活用して実社会の中でプロトタイピングをおこなうこと

この①～③を通じて

（1）**参加者自身が自分は社会を変えられるという手応えを獲得**し、

（2）**参加者の社会に対する信頼を向上**させ、

自分のワガママが社会課題解決へ繋がることに気づき、

それを応援してくれる人が地域に数多く存在する環境（文化）づくりを目指しています。

コーディネーターの役割

ワガママSDGsでは、

参加者たちがチーム単位で自由に企画を立案して、プロトタイピングをおこないます。

そこで、コーディネーターは、参加者たちと一緒に企画の実現に向けて伴走します。

コーディネーターは、主に3つの視点から参加者と関わります。

肯定　協調　接続

これらを通じて「参加者自身の学び」と「プロジェクトの成功」の両立を目指して、

共に試行錯誤するのがコーディネーターの役割です。

そのため、コーディネーターには

実践的な学習の支援、まちづくり、プロジェクトマネジメントなど

参加者と地域が協働する場づくりや産官学連携の知識・経験が求められます。

2021年度、現場にて

いかに「半径1mのSDGs」に引き寄せるか

ここからは、2021年に実施したワガママSGDsに

実際にコーディネーターとして関わった5名のお話と、

組成された6つのプロジェクトの事例をもとに、

コーディネーターがどのように参加者に関わっていたのかを紐解いていきます。

坂本友里恵

もうちょっと現実的なものを作ったらと口を出しそうになったけど、自分たちが最初に思った『コレ!』をカタチにする過程に意義があったんだろうな。**楽しいとしんどいが、ずっと行き来していた様子。**

頭できれいな見通しを立てても、**たいていリアルに実行する段で泥臭く試行錯誤する**ことになる。それを実証的に学べるプログラムってじつは稀有かもしれない。

唐津周平

江副真文

インプットとして情報も課題意識ももち合わせている。でも、どうアウトプットしたらいいかわからない。そんな参加者たちが**『半径1メートル』の身近な範囲でアクションを練って実行できる場**だった。

大福聡平

グローバルな視野で課題意識を携えていた参加者は、『半径1メートル』に引き寄せる際、折り合いのつけかたが難しかったと思う。でも、**プロトタイピングでリアルな反応を得るにつれて、手応えをつかんでいっていた。**

プロトタイピングを通して進路を見定めた参加者もいた。途中、湧いたり寄せられたりするアイデアに参加者たちが右往左往する場面もあったけど、**自分たちで『これを実現する』と言語化して立ち戻っていった姿**が印象的。

坪田卓巳

2021年度、現場にて

ワガママから出発した、6つのプロジェクト

1 高校生が考える、進化系「こども食堂」

中高生2名と協働メンバー2者（調理専門学校とNPO2名）のチーム。

「孤立する人々に食事とともにコミュニケーションを提供したい」という思いから、多世代交流の場となる「まんぷく食堂」を、お寺の協力などを得て4回開催。調理専門学校の学生にも協力を募り、栄養にも配慮した食事を提供した。

2 評価のためではなく、自分たちがやりたいことを思いきりできる「学生の学生による学生のための場所」

中高生6名と協働メンバー4名（阪急オアシス、六甲バター、京都信金、IT企業経営者）のチーム。

18歳未満の学生が保護者や学校からの制約なしに、「当事者」として自由に集まり、交流できる施設をJR新長田駅近くの商店街エリアに開設。チーム内で運営ルールやシフトを決めて実証的に運営した。

3 オンライン国際交流「みんなの学び舎 ～for myself～」

中高生1名と協働メンバー3名（大学生、NPO、在米教育関係者）のチーム。

「海外にいる同世代と友だちになりたい」「途上国への国際貢献を自らできる機会がほしい」というワガママを叶える第一歩として、日本の中高生と東南アジア諸国の同世代が国際交流（学習）するオンライン教室を4回実施。英語でSDGsをテーマにディスカッションした。

4 街中にいるときや災害時にスマホの充電が切れたらイヤだ！ 携帯できる「充電ポケット」開発

中高生2名と協働メンバー4名（神戸阪急、大学生、投資会社役員、ITエンジニア）のチーム。

女性の既製服にポケットが少ないことにも目を向けて、取り外し可能なポケットを2回にわたって試作。試作前には、紳士服テーラーでポケットを学んだ。衣類と充電機能の同期方法の検討では、先行研究をしていた大学に問い合わせたことも。

5 学校嫌いの3人が考える「行きたくなる学校」

中高生3名と協働メンバー4名（神戸市役所、H_2Oリテイリング、大学生、在米研究者）のチーム。

「私たちが求めるのはゆるさではない。選択肢だ!」と、学校の固定的なカリキュラムへの問題意識から、ディスカッションを中心とした「理想の学校」イベントを設計。イベントの実現は叶わなかったが、それぞれの学校の先生たちをも巻き込んだリサーチを実施。

6 免許がない私たちの、雨天用MaaS（Mobility as a Service）開発

中高生3名と協働メンバー4名（神戸市役所、IT企業経営者、神戸製鋼、NPO）のチーム。

自転車通学の中高生が、雨の日に快適・安全に移動できる方法として、免許なしで公道を走行できる「シニアカー」に着目。別注の屋根をつけて走行実験し、デザイン性を考慮して装飾も検討した。

2021年度、現場にて —— PROJECT 01. 高校生が考える、進化系「こども食堂」

だれでも食堂 まんぷく

居場所

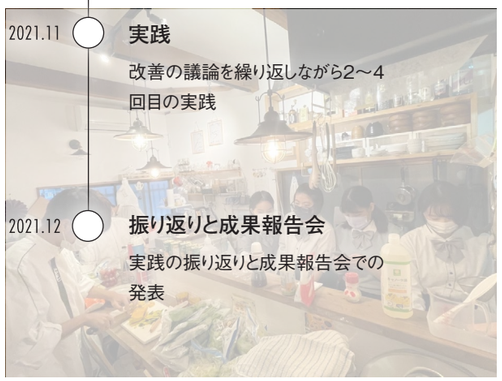
中高生2名（あいか・高2、ひろ・高2）と協働メンバー2者（調理専門学校とNPO2名）のチーム。

「孤立する人々に食事とともにコミュニケーションを提供したい」という思いから、多世代交流の場となる「まんぷく食堂」を、お寺の協力などを得て4回開催。調理専門学校の学生にも協力を募り、栄養にも配慮した食事を提供した。

2021.8 **合宿、チーム結成**
協働メンバーと取り組むテーマについての議論（途上国支援から国内の子ども食堂へ）

2021.9 **コンセプト決め、リサーチ**
子ども食堂のコンセプト（だれでも食堂）に決定。場所のリサーチ、開催場所の下見・決定

2021.10 **企画・広報**
チラシの作成、調理専門学校生とレシピの作成、チラシの配布など広報、実践



2021.11 **実践**
改善の議論を繰り返しながら2～4回目の実践

2021.12 **振り返りと成果報告会**
実践の振り返りと成果報告会での発表

◤ここでつまずいた！◢

テーマが自分ごとになりきれていない。

持っている情報量が少ない、アイデアが出ない……
SDGsのイメージ（貧困解決）が先行してしまい、
自分の身の回りから考えてみるということをする機会がなかった。

葛藤の背景

ワガママSDGsは「半径1mのSDGs」というコンセプトに現れているように、参加者にとって身近な「自分ごと」を解決することがSDGsにつながるということを大切にしているプログラムである。一方、あいかとひろはそもそもこのワガママSDGsに応募する時点から「SDGsといえば途上国の貧困のような問題に取り組むこと」というイメージがあり、途上国の貧困解決を目指す活動をしたいと考えていた。テーマ設定時点でも、あいかとひろはまだ当初持っていたSDGsのイメージから抜け出せず、「テレビCMで見たかわいそうな人たち」の支援に取り組みたいと考えていた。

コーディネーターのアクション

「途上国支援がしたい」という想いを汲んでそこに取り組ませる方向性もあったが、コーディネーターは「自分ごとから始めて欲しい」というワガママSDGsのコンセプトを重要視した。「なぜ自分たちがその問題に取り組む必要があるのか」を言語化し説明できる必要があると考え、対話を繰り返したが、身近に途上国の友人がいるわけでもなく、困難であった。一方協働メンバーなどから、「日本も貧困問題は大きな課題である」ことや、コロナの中でどのように支援できるのか、という点について指摘があったことで、国内の課題にも目を向ける視点を得た。その後、自分たち自身で国内における課題などについて調べたり、それに基づいて企画アイデアを出す中で、「自分たちは本当は何に関心があるのか」問うことを深掘りする機会を作っていった。コーディネーターはその都度出てくるアイデアを肯定しつつ、それを元に関心の軸を整理した。

コーディネートの結果

そこで出てきた子ども食堂というキーワードが二人に刺さり、子ども食堂に取り組むことが決まった。

いま思えば……
一度、途上国支援に思いっきり取り組ませる方向もあったかもしれない。

大福聡平

2021年度、現場にて —— PROJECT 02. 評価のためではない、当事者どうしの交流

学生の学生による学生のための場所

居場所

中高生6名（はるき・高1、ゆう・高1、ゆづぽん・中3、のん・高2、まお・高1、かむい・中3）と協働メンバー4名（阪急オアシス、六甲バター、京都信金、IT企業経営者）のチーム。

18歳未満の学生が保護者や学校からの制約なしに、「当事者」として自由に集まり、交流できる施設をJR新長田駅近くの商店街エリアに開設。チーム内で運営ルールやシフトを決めて実証的に運営した。

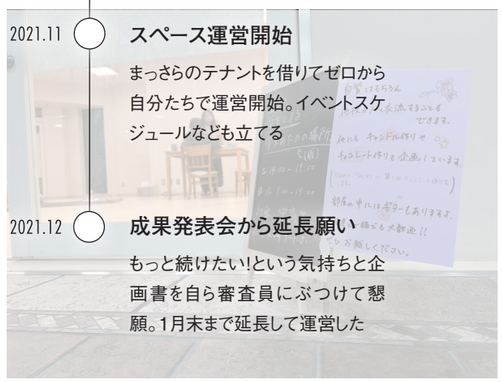
2021.8 **合宿・チーム結成**
みんなのワガママを詰め込んだ「ワガママハウス」企画がつくられた

2021.9 **企画書づくり**
物件を探すにあたって、企画書が必要となるため、ミーティングを重ねた。同時に物件も調査した

2021.10 **物件探し**
不動産屋や空き家バンクなどに直接問い合わせて物件を下見。友人のお父さんやコーディネーター経由でも開拓

2021.11 **スペース運営開始**
まっさらのテナントを借りてゼロから自分たちで運営開始。イベントスケジュールなども立てる

2021.12 **成果発表会から延長願い**
もっと続けたい!という気持ちと企画書を自ら審査員にぶつけて懇願。1月末まで延長して運営した



◤ここでつまずいた!◢

人生初の物件探し。思うように物件が決まらない。

メンバー6人の想いを詰め込んだ「ワガママハウス」の企画は、
「駅から徒歩10分圏内」
「料理や音楽の演奏、自習などができる」
「災害時にペットの避難場所としても利用可能」
「パラスポーツができる庭もある戸建て」
を2か月間借り上げたいといった希望だった。
参加者たちが様々な物件に問い合わせて相談したが、
参加者たちの希望と物件の契約条件が合わず、物件探しは難航した。

葛藤の背景

コーディネーターとしては、参加者自身が物件を開拓する過程によって、プログラムの目的が達成されると考えていたため静観していた。しかし、ワガママ（自分たちの希望）で突き進むあまり、このままだと物件が決まらず終了する恐れもあった。コーディネーターが現実的な視点から物件の情報提供をすれば契約は決まるが、プログラムの目的を阻害することにならないか葛藤していた。

コーディネーターのアクション

契約見込みの高そうな物件を複数情報提供して、参加者達の反応を伺った。何度も不動産屋から断られて若干疲弊している状況でもあったため、一緒にプロジェクトを実現するメンバーの姿勢に立って、物件探しを支援した。また、12月までの期限上、物件を見つけて自分たちの居場所をつくる段階のプロトタイピングへ移行する方がbetterだと判断した。

コーディネートの結果

情報提供した物件に参加者が興味を持ってくれたため、実際の相談や不動産屋とのやりとり含めて参加者が主体的に調整して新長田の商店街にあるテナントで契約が決まった。

いま思えば……
みんなのアイデアを束ねた企画だったため、チーム編成の時点でより適切な分け方がなされたほうがよかったかもしれない。

唐津周平

2021年度、現場にて —— PROJECT 03. オンライン国際交流

みんなの学び舎 ～for myself～

学び

中高生1名（まーちゃん・高3）と協働メンバー3名（大学生、NPO、在米教育関係者）のチーム。

「海外にいる同世代と友だちになりたい」「途上国への国際貢献を自らできる機会がほしい」というワガママを叶える第一歩として、日本の中高生と東南アジア諸国の同世代が国際交流（学習）するオンライン教室を4回実施。英語でSDGsをテーマにディスカッションした。

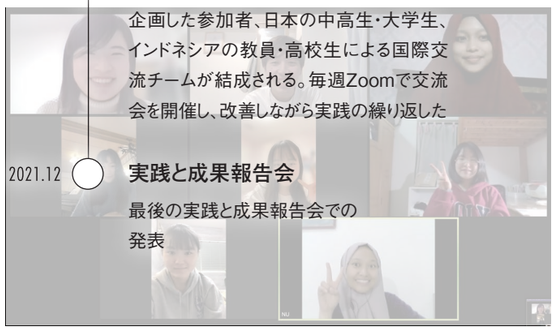
2021.8 **合宿、大枠のテーマ決定**
途上国の教育支援につながるオンライン国際交流を企画

2021.9 **企画のブラッシュアップ、仲間集め**
NGO職員へのヒアリング、大学生協力メンバー募集記事作成

2021.10 **広報**
日本の中高生参加者募集記事作成・インドネシアの教員や学生の参加をお願いする文書を英語で作成

2021.11 **実践**
企画した参加者、日本の中高生・大学生、インドネシアの教員・高校生による国際交流チームが結成される。毎週Zoomで交流会を開催し、改善しながら実践の繰り返した

2021.12 **実践と成果報告会**
最後の実践と成果報告会での発表



◤ここでつまずいた!◢

対象のニーズが把握できていない。

国際交流の参加対象となる海外の学生が参加するにはハードルの高い企画になっていた。
自分の想像だけで対象をイメージし、対象の実際の声を聞けていなかった。

葛藤の背景

このプロジェクトでは、途上国の学生とオンラインで交流の場を設け、お互いが英語でコミュニケーションを取る機会を作ることを目指していた。目的として、「途上国の貧困の連鎖を食い止めるため英語教育の機会を提供したい」「途上国にオンライン教育の機会を提供したい」といったことがあったが、参加者自身が持つ途上国の情報は一部のメディアを通して得られる限定的なものであった。

コーディネーターのアクション

実際に途上国で活動を行うNGO職員にインタビューする機会を作った。途上国のリアルな現状や国際協力や途上国支援に携わる人がどういったことを考えて活動に従事しているのかを参考にすることで、途上国の学生にも参加してもらいやすい企画に設計し直すヒントが得られるのではと思った。

コーディネートの結果

ヒアリングしたNGO職員は、現地の現状だけでなく、対象の視点になって考えることの重要さを伝えたくれた。さらに実際に現地の人と繋げてヒアリングする機会を作ってくれた。その話を踏まえて「どうすれば海外の学生が参加したくなるか、参加しやすくなるか」という視点を持って企画を考え直すことができた。

いま思えば……
コーディネーターから「相手の目線となって考えること」を伝えることもできたと思うが、ここではあえて第三者であるNGO職員の方から伝えてもらったことで、結果的により説得力を持って真意が伝わったのではないか。

大福聡平

2021年度、現場にて —— PROJECT 04. 外出時・災害時もスマホを使い続けたい

くらし

携帯できる「充電ポケット」

中高生2名（るな・中1、ゆうほ・中3）と協働メンバー4名（神戸阪急、大学生、投資会社役員、ITエンジニア）のチーム。

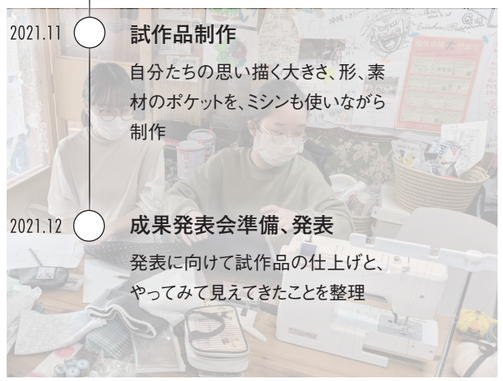
女性の既製服にポケットが少ないことにも目を向け、取り外し可能なポケットを2回にわたって試作。試作前には、紳士服テーラーでポケットを学んだ。衣類と充電機能の同期方法の検討では、先行研究をしていた大学に問い合わせたことも。

2021.8 **合宿、チーム結成**
どんな人向けの「充電ポケット」を考えるか、協働メンバーも一緒に検討

2021.9 **ニーズ調査、充電機能調査**
ポケットに求めている内容を属性別にアンケートでヒアリング。気になる充電の仕組みを開発している金沢大学にも問い合わせ実施

2021.10 **ポケット調査**
三宮に繰り出し、神戸阪急で「紳士服」「婦人服」「子供服」それぞれについているポケットを調査

2021.11 **試作品制作**
自分たちの思い描く大きさ、形、素材のポケットを、ミシンも使いながら制作



2021.12 **成果発表会準備、発表**
発表に向けて試作品の仕上げと、やってみて見えてきたことを整理

◤ここでつまずいた！◢

ミーティング日程などを決めるとき、スタートの数回をコーディネーターが調整してしまったので、「頼る」体制になってしまった。

参加者自身に決めることを促したものの、「コーディネーターが決めて」と委ねてきた。メンバーが中3と中1の2人しかいないというのと、2人の関係性ができるまでに時間がかかり、2人に色々と決めたり調整する余裕がなかった。

葛藤の背景

参加者の一人が最年少の中1ということもあり、なかなか自分から発言したり「私これやります」というような状況にはならなかった。もう一人の参加者も、まずはメンバー間の関係性をつくることに頑張っており、プロトタイピングしていく実際の作業を考えていくことになかなか自主性が持てず、コーディネーターを頼らざるを得なかった。

コーディネーターのアクション

日程を決めるための「調整さん」というツールを教えたり、参加者自身が不安な時は、slackに投稿する文章を事前にDMで確認したりしていた。いきなり「自分たちで色々と調整もしてみて!」とは言うものの、全てのやりとりや使うツールが初めてだったりもするので、1つ1つの作業のハードルを低く（スモールステップ）して、徐々に「自分でもできる!」と思ってもらう流れを心がけた。

コーディネートの結果

後半は、参加者2人で日程調整をして、コーディネーター抜きのミーティングをおこなったりもしていた。そのなかで2人が関係性を築いて「チーム」になっていったように見受けられる。

いま思えば……
最初から「自主性」を尊重し、ミーティング日程調整を2人に任せたらよかったかも。

坂本友里恵

2021年度、現場にて —— PROJECT 05. 学校嫌いの3人が考える「行きたくなる学校」

くらし

学ぶ人の選択肢

中高生3名（にな・中3、ジャクス・高1、みゆ・高2）と協働メンバー4名（神戸市役所、H2Oリテイリング、大学生、在米研究者）のチーム。

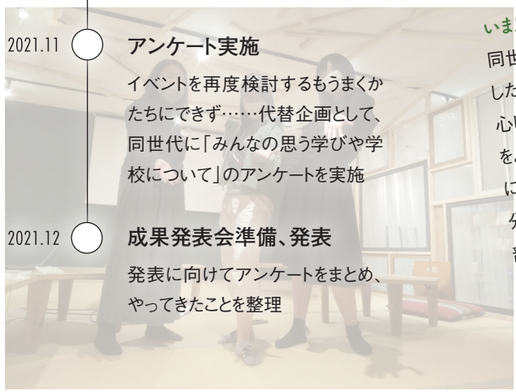
「私たちが求めるのはゆるさではない。選択肢だ!」と、学校の固定的なカリキュラムへの問題意識から、ディスカッションを中心とした「理想の学校」イベントを設計。イベントの実現は叶わなかったが、それぞれの学校の先生たちをも巻き込んだリサーチを実施。

2021.8 **合宿、チーム結成**
どんな人向けの「学びの場」を考えるか、協働メンバーも一緒に検討

2021.9 **企画のブラッシュアップ**
それぞれの「学び」に対するもやもやをぶつけ合い。各自の担任の先生にヒアリングも実施

2021.10 **「理想の学校」検討**
実験的に、1日をつかって理想の学校をやってみれないか検討するも、いろいろな課題があり実現に至れなかった

2021.11 **アンケート実施**
イベントを再度検討するもうまくかたちにできず……代替企画として、同世代に「みんなの思う学びや学校について」のアンケートを実施



2021.12 **成果発表会準備、発表**
発表に向けてアンケートをまとめ、やってきたことを整理

◤ここでつまずいた！◢

現状について不満や違和感は多く感じているが、その解決策自体を見出せない。

学びの場を企画するうえで、
「誰がその学びの機会を提供するのか」について
議論が挙がった。
同世代で「不満や違和感」を共有・共通はしているが、
それを改善させるためは
「何か」で同世代どうしと「共感」を持たなければ動かない
という考え方に至っていなかった。
また、そうした課題（自分達が学びたいと思っていること）を
解決してくれる人をどう探せばいいかの術も
見出せていなかった。

葛藤の背景

自分たちが同世代に「学びの場」を生み出して提供するにあたって、いま自分たちが違和感や不満に感じている「学校（授業）」とどう差別化するべきなのか、とても悩んでいた。

コーディネーターのアクション

例えば……ということでジェンダー問題について活動しているNPO団体や社会活動化、企業などをメンバーに情報共有することで、学びの場実現に向けた解像度を高めるフォローアップを試みた。

コーディネートの結果

- そもそも時間の猶予がなく、結局外部の人を巻き込むような企画にまで至らなかった。
- メンバーの意向としては「大人から教授を受ける環境よりも、同世代で対話ができる環境づくりを意識したい」という点から外部人材を呼ぶことにさほどモチベーションがなかった
- 結果的に、ワガママを詰めた学校を開催したかったが、準備時間が足りず失敗。アンケートを作り、みんなのリアルなワガママ調査するまでに終わった

いま思えば……
同世代での対話の場を尊重した企画思考には非常に感心した一方で、やはりその場をより豊かなものにするためには、「教授」でなくともその分野について知見のある外部人材を入れておこなうことにも価値があったのではないかと考えている。

江副真文

2021年度、現場にて —— PROJECT 06. 免許がない私たちの、雨天用Maas開発

くらし

雨に濡れずに誰でも利用できるモビリティ「WE:BIKE」

中高生3名（ゆいゆい・高1、あおい・高2、みき・中3）と協働メンバー4名（神戸市役所、IT企業経営者、神戸製鋼、NPO）のチーム。

自転車通学の中高生が、雨の日に快適・安全に移動できる方法として、免許なしで公道を走行できる「シニアカー」に着目。別注の屋根をつけて走行実験し、デザイン性を考慮して装飾も検討した。

2021.8 **合宿、チーム結成**

協働メンバーと取り組むテーマについて議論（どんな乗り物がシェアできるか、どんなシステムが利用できるか、どうすれば濡れないかなど）

2021.9 **シニアカーと出会う**

福祉のまちづくり研究所見学、車椅子WHILL試乗、シニアカー発見、市場調査@サイクルあさひ(東京)、かっこいいシニアカー、次世代モビリティ、シェアサービス調査

2021.10 **シニアカー購入**

自転車用屋根購入（中国より輸入）、シニアカーもレンタルが難しいことがわかり購入

2021.11 **試作品制作、路上試乗実験**

シニアカーに屋根取り付け、東京からのメンバーも来神。路上試乗実験

2021.12 **ロゴマークも決定**

色味を布地で変更。ネーミング「WE:BIKE」に決定! ロゴマークも作成。最終発表会に向けて紹介動画を作成。発表会当日は、東京からのオンライン参加も交えてハイブリット発表!

ここでつまずいた!

大人に対する遠慮から、自らの意見を伝えることに抵抗があったか。

協働メンバーから
沖縄の運転代行の事例や電動車椅子などの
事例を紹介される中で、
実現できそうなことについて判断を決めかねていた。
どんどん新しい情報が入っていくことにより、
そもそも何を目指していたかが忘れがちになっていた。

葛藤の背景

参加者同士も、画面をオフにして参加しがちで、信頼関係を築ききれていなかったかもしれない。また、親以上に年代が離れた協働メンバーとディスカッションすることにも、慣れていなかった。

いま思えば……
車椅子のレンタルをおこなう、
ウィズアスを紹介することもできたが、
情報をあまり提供しすぎても
参加者たちの腑に落ちなければ
時間切れになる可能性があった。

坪田卓巳

コーディネーターのアクション

協働メンバーを抜きにした打ち合せのなかで、ブレストをした際のジャムボードを振り返り、本当に自分たちのワガママは何だったかの確認した。

コーディネートの結果

既存の乗り物（シニアカー）を改造して、雨に濡れずに誰でも利用できるモビリティをプロトタイピングすることに決める。

コーディネートの姿勢

6つのプロジェクト事例では、プロジェクトの実現を支援するコーディネーターがさまざまな葛藤を抱えながら参加者に関わっていたことを紹介しました。
このページでは、コーディネーターの3つの役割「肯定、協調、接続」についてコーディネーターから出てきた言葉をもとに深掘りしていきます。

肯定

- 「それええやん」「おもろいな」「なるほどね」と、とにかく参加者の話を否定しないで肯定する、面白がる、ということは大事にしてきた。
- 「大の大人が、自分みたいな中学生の意見を真剣に聞いてくれることが印象に残っている」という参加者の発言があった。逆に言えば普段なかなか大人と対等な意見交換することって中高生にはない。だからこそ、ちゃんと聞いてる、受け入れている、理解しているっていうことを伝えることは重要だと感じる。
- コーディネーターから見て「それじゃ上手くいかないんじゃない?」というアイデアやアクションももちろんある。それでも全てを否定するのではなく、良い部分と改善すべき点を切り分けてフィードバックしたり、失敗しても良いから一旦やらせてみて気づかせる、ということもあった。
- でも逆に、ただ肯定し続けるだけだとアイデアは拡散する一方でプロジェクトがなかなか進まない。明確に決まっている期限とプロジェクトの実現可能性を頭の隅に置きながら、アイデアを拡散させるタイミングと収束させるタイミングを考えていた。

協調

- コーディネーターや協働メンバーを含め、プロジェクトチームが良い関係性でプロトタイピングを進められること。これは、単にプロジェクトが成功することよりも大事にしていたかもしれない。
- どんな些細なことでも発言できる安心感とか、しんどい時はお互いに頼って良いんだよ、むしろ頼っていこうよっていう信頼関係を作り上げること。これをいかに初期の段階でできるかでプロジェクトの進度が大きく変わってくる。
- そのために、ミーティングでは丁寧に話を振ってあげることも重要なんだけど、逆にコーディネーターが参加しないミーティングを設定したりして、参加者だけでじっくり話をする機会を作ったり、協働メンバーに頼らざるを得ない状況を作ったりするのも実は有効だったのかなと。結果として参加者同士や協働メンバーとの関係性が深まるきっかけになっていた。

接続

- おそらく、地域でワガママを実現するにあたって1番重要なのが、「地域で面白いことをしている人」という地域資源といかにつながっているか、ということ。同時に参加者にとってそれが1番欠けていることでもある。そういう意味ではコーディネーターの肝となるのがこの接続という役割かも。
- 参加者が取り組むテーマに詳しい専門家を紹介してヒアリングの機会を作ったり、場に根ざしたプロジェクトであればそのエリアのキーパーソンを紹介したり。様々な分野のプレイヤーとつながっているコーディネーターの腕の見せどころ。
- 人と繋げることだけが接続ではなくて、参加者が知らない知識を共有したり、プロジェクトを進める上で便利なITツールの使い方を伝えたりすることも一種の接続。つまり、参加者が今まで生きていきた世界の外のリソースとつなげる感じ。
- 協働メンバーからは、時にかなりテクニカルな意見をもらうこともある。そういうときは、参加者に理解してもらいやすい言葉に翻訳することでその意見を吸収するサポートもしていた。

プロジェクトの実現可能性や、プロジェクト終了までの時期、参加者同士の関係性など、
さまざまな要素や視点を考えながら「肯定、協調、接続」を念頭に置きつつ、
その都度最適だと思えるコーディネートをしてきたつもりです。
本当に最適だったかは正直わからないところもありますが、
常にそういった視点を入れながらコーディネートすることが重要だと思います。

協働メンバーとは？ プロトタイピングとは？

協働メンバーとは、どのような人ですか？

協賛企業の社員や行政の職員など
有志で参加する社会人メンバーです。
基本的に一人一つのチームに参加して、
チームの一員として
ミーティングや実践の場に参加します。

コーディネーターと協働メンバーの役割は何が違いますか？

コーディネーターも協働メンバーも、
「肯定・協調・接続」という役割が求められます。
ただ、協働メンバーはあくまでチームの一員として
プロジェクトに関わる一方、
コーディネーターはプログラム全体の運営に関わるため、
プロジェクトをより俯瞰して必要な介入をおこないます。
コーディネーターには、例えば
協働メンバーそのものを増やすという接続や、
参加者主体で進めながらも
期限内のプロジェクト実現を担保するためのスケジュール調整
などが求められます。

プロトタイピングとは、どのようなことをしますか？

プロトタイピングは「試作」を意味します。
その言葉通り、
とにかく参加者のワガママを試しにやってみる、
形にしてみることを
プロトタイピングと呼んでいます。
参加者が形にしたワガママが試作となり、
それをブラッシュアップしていくことで、
最終的には社会に実装される期待も込めています。

ワガママSDGs 2021年度コーディネーターは何を考え、どう動いたか。
WAGAMAMA SDGs reference book for coordinaters 2022

2022年3月31日発行

発行所：一般社団法人リベルタ学舎
発行人：湯川カナ
編集：大福聡平、唐津周平
2021年度コーディネーター：江副真文、唐津周平、坂本友里恵、大福聡平、坪田卓巳
デザイン：大森ちはる
本書の無断複写・複製・転載を禁じます。